

「眼が不快・痛い！(眼瞼の疾患)」

鳥取大学 農学部 共同獣医学科 獣医神経病・腫瘍学教育研究分野
准教授 東 和生

眼科疾患における飼い主さんからの主な稟告として、「眼を痛そうにしている、不快そうにしている」という稟告をしばしば耳にします。様々な疾患により眼部の疼痛・不快感が発生します。一般的には、角膜潰瘍などの角膜疾患、緑内障、水晶体脱臼、ブドウ膜炎などがよく知られています。本学動物医療センターで眼の不快感を主訴として来院する症例では、眼瞼(図1)の疾患に起因する場合もしばしばあります。今回は、眼部の不快感・疼痛を主訴に来院された症例をご紹介します。

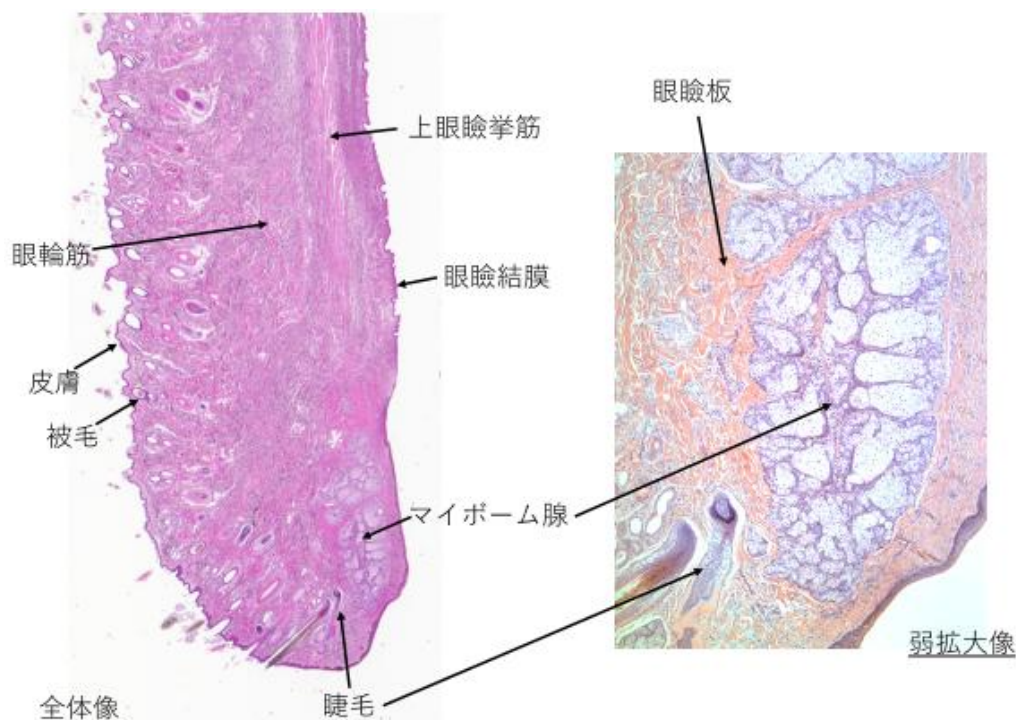


図1. 犬の上眼瞼横断面(HE染色)

1) 異所性睫毛(図2)

なんとなく眼に不快を感じている症例などで、スリットランプ検査により確認される場合があります。睫毛の抜去により不快感は改善されます。短期間で角膜潰瘍を繰り返しているような症例でも、恒常的な睫毛による角膜への刺激がその一因となっていることが示唆される場合があります。

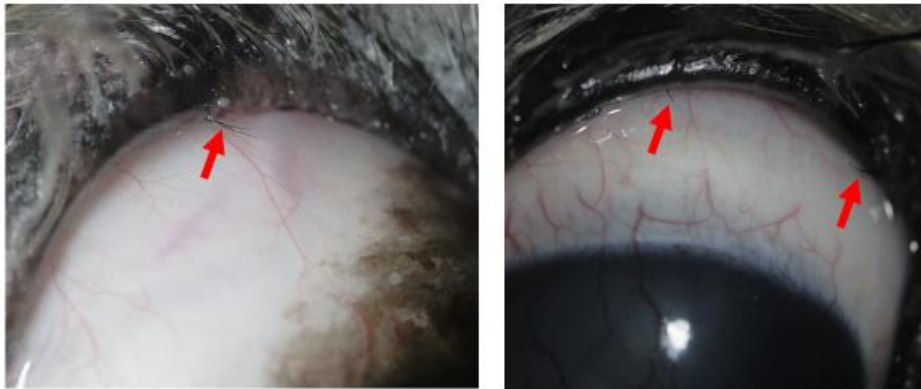


図 2. 異所性睫毛

異所性睫毛を赤矢印で示しています。これらの消耗は、抜去することで眼表面の不快感の改善につながる場合があります。

2) マイボーム腺機能不全(図 3)

犬種・猫種問わず、発生する可能性があります。マイボーム腺からは、涙液の油層を構成する油脂成分が分泌されています。この油脂成分は眼表面からの涙液の過剰な分泌を防ぎ、瞬きの際の摩擦の軽減にも寄与しています。症状としては、眼表面が乾燥している、眼瞼が腫れている、マイボーム腺の開口部の閉塞(plugging)により診断される場合があります。また、持続的なマイボーム腺機能不全は、眼表面環境を悪化させ、細菌感染の温床となる場合もあり、他の眼瞼疾患発症を助長させる場合があります。本院でも、マイボーム腺機能不全以外の主訴により紹介来院された症例でも、多くの症例でマイボーム腺機能不全を認めております。治療法としては、圧迫による閉塞の解除、生理食塩水などによる清拭、温療法(ホットアイマスク)などを実施していただいています。

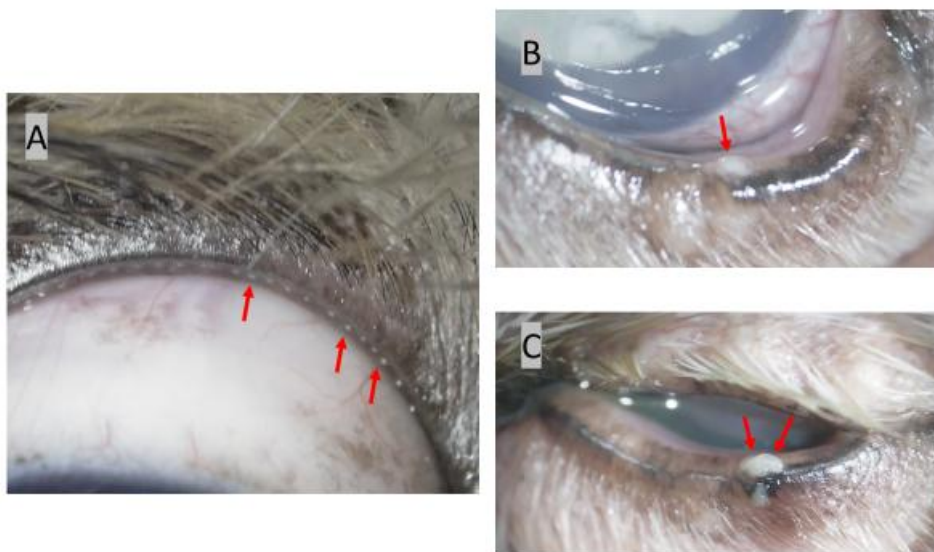


図3. マイボーム腺機能不全

A. 上眼瞼マイボーム腺開口部の閉塞(plugging) B. 下眼瞼マイボーム腺開口部の閉塞 C. 圧迫による脂質(マイバム)の排出。上記A・Bのような症例にしばしば遭遇します。圧迫可能な場合はマイボーム腺圧迫鑷子等で圧排します。これらの症例では、眼部の清拭・温療法を併せて行います。

3) 眼瞼内反症(図4)

眼瞼の内反により、被毛が角結膜と接触し不快感・疼痛の原因となります。症状としては流涙(眼瞼部の被毛に流涙が多量に付着している)、眼をしょぼつかせているなどの症状を呈します。また、眼脂の発生を繰り返す場合にも眼瞼内反症が見られる場合があります。なかには、角膜疾患の憎悪要因となる場合もあります。外科的治療法としては、一般的には眼瞼形成術あるいはタッキング法などがあげられます。また、一時的な被毛接触回避にはバンテージコンタクトレンズも使用可能です。本院では、手術用顕微鏡を用いた眼瞼形成手術を実施しております。皮膚を6-0ナイロンで縫合しますので、傷口が目立ちにくいのが特徴です。

手術前

手術後

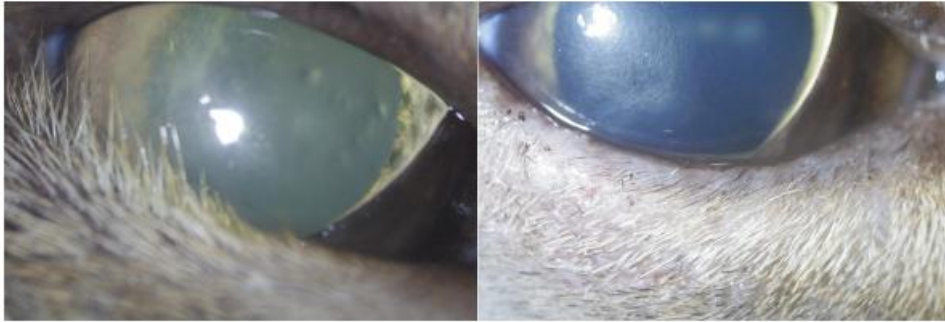


図 4. 下眼瞼内反症

下眼瞼形成術前と術 3 週間後(抜糸直後)の写真です。内反による被毛の接触がなくなり、羞明感は消失しました。また、比較的細い縫合糸で皮膚を縫合しますので、傷口は目立ちにくくなっています。

眼表面環境の健全化が眼の病気を予防する！

眼表面環境(オキュラーサーフェイス)のトラブルは、人で非常に多く眼表面環境の改善は疾患の治療・予防につながる場合が多くあります。動物医療においては、眼表面環境という考え方はさほど浸透していない印象を持っています。実際には、良好な眼表面環境を維持することはさほど難しくありません。被毛の眼部への接触をさせないための清拭、異所性睫毛などの抜去、眼瞼の温療法などちょっとした事の積み重ねです。大事な家族だからこそ、普段からのちょっとしたケアの積み重ねが重要です。繰り返す眼瞼炎・角結膜炎・流涙・羞明感など病態によっては飼い主さんに眼表面環境改善に向けた取り組みを積極的に実施していただいています。